

輸 血 部

教 授：星 順隆 輸血管理学，小児血液腫瘍学，造血細胞移植
准教授：田崎 哲典 外科輸血学，輸血管理学

教育・研究概要

研究

1) 輸血の安全管理（特に細菌感染対策）：血小板製剤の細菌混入確認試験の実施。さらに、ヘモビジランス体制構築のための副作用全数調査を企画

2) 適正輸血の推進に関する検討：院内の血液製剤の使用状況の解析を行い，適正輸血の推進に有用な方策を立案し，試行した。

3) 輸血検査機器の開発：全自動輸血検査機器の有用性の評価を実施。

教育

- 1) 輸血免疫学：臨床免疫で講義（90分）3年生
- 2) 輸血学基礎：医学演習講義（90分×3）3年生
- 3) 輸血学：外科学総論講義（90分×2）4年生
- 4) 血液センター見学：実習（90分×10）4年生
- 5) 救急と輸血：救急医学（45分）6年生
- 6) 輸血研修：初期研修（14時間×8）初期研修医

「点検・評価」

2006年度に田崎哲典准教授がスタッフとして参加し，研究体制の構築と管理体制の強化を図る事ができると思われた。第55回輸血細胞治療学会総会では5題，米国血液銀行協会（AABB）2006年次総会で3題を発表することができた。しかし，大坪寛子助教が10月より国立感染症研究所に出向し，再びマンパワー不足となってしまった。

今日，輸血副作用の主たるものは細菌感染症とTRALI（急性肺障害）であり，原因究明と予防法の開発が求められているために，研究の主体も細菌混入の同定法の開発に力をいれた。さらに副作用の適正評価体制の確立のために，国家プロジェクトとしてヘモビジランスシステムの立ち上げに，大坪助教が乞われて参加することになったのは，本学の対応が認められたものとして評価できると考える。

教育に関しては19年度に講義枠が拡大され，学会推奨の輸血教育カリキュラムに近づけることができた。また，20年度は講義2枠が減少したが，実習（3時間）が追加された事により，さらに効率的な輸血教育を実施できそうである。

星は，日本輸血細胞治療学会の法人担当理事として，法人事業の運営を軌道にのせる事で，社会的貢献をめざした。

従って，自己評価では前年に引き続き80点と考えているが，前年度に引き続き本年度も，大学院規定の論文数の作成目標を達成できなかった事が残念である。

研 究 業 績

I. 原著論文

- 1) Yano S, Asai O, Dobashi N, Osawa H, Takei Y, Takahara S, Otsubo H, Ogasawara Y, Yamaguchi Y, Saito T, Minami J, Hoshi Y, Usui N. Long-term follow-up of autologous stem cell transplantation for patients with aggressive non-Hodgkin lymphoma who had bone marrow involvement at initial diagnosis in the pre-rituximab era. Clin Lymphoma Myeloma 2007; 7(5): 361-3.
- 2) 大坪寛子，山口一成，星 順隆．溶存酸素消費量測定による血小板製剤内細菌検出感度についての検討．日輸血細胞治療会誌 2008; 54(3): 372-7.
- 3) Tasaki T, Ohto H. Nineteen years of experience with autotransfusion for elective surgery in children: more troublesome than we expected. Transfusion 2007; 47(8): 1503-9.
- 4) Tasaki T, Gotoh K, Fujii K, Sasaki S, Satoh S, Takadate J, Otsubo H, Hoshi Y. Accumulated cytokines in stored autologous blood do not cause febrile nonhemolytic transfusion reactions. Transfus Apher Sci 2008; 39(1): 15-9.

II. 総 説

- 1) 星 順隆．【造血幹細胞移植のすべて】ドナーの安全性確保 適格性．血腫瘍 2007; 55(Suppl. 5): 285-8.
- 2) 星 順隆．輸血安全確保のための inspection & Accreditation (I&A)．臨検 2008; 52(2): 163-8.
- 3) 星 順隆．【輸血医療・医学の新展開】輸血の現状と課題 小児の輸血 現状と問題点．医のあゆみ 2006; 218(6): 593-8.

III. 学会発表

- 1) 大坪寛子，山口一成（国立感染症研究所），星 順隆．溶存酸素濃度測定法を用いた血小板製剤内細菌検出法の確立．第55回日本輸血・細胞治療学会総会．名古屋，5月．
- 2) 市井直美，島 誠子，堀井節子，近藤恵子，鶴間久美子，伊藤幸子，堀 淑恵，山本公子，長谷川望，山崎恵美，永井高史，大坪弘子，星 順隆．輸血副作用管理

への対応. 第 55 回日本輸血・細胞治療学会総会. 名古屋, 5 月.

- 3) 星 順隆, 大坪寛子, 長谷川望, 長田広司. 本大学における輸血医学教育の現況と問題点 第 3 報. 第 55 回日本輸血・細胞治療学会総会. 名古屋, 5 月.
- 4) 田崎哲典, 諏訪部章, 猪狩次雄, 菅野隆浩, 大戸 育. 自己血の保存前白血球除去を無作為化比較試験で評価する. 第 55 回日本輸血・細胞治療学会総会. 名古屋, 5 月.
- 5) Tasaki T, Otsubo H, Osada K, Hoshi Y. Autologous blood units accumulate cytokines following five weeks of liquid storage but do not provoke fibrile non-hemolytic transfusion reactions. AABB Annual Meeting and TXPO 2007. Anaheim, Oct.
- 6) Otsubo H, Sasaki Y, Yamaguti K, Hoshi Y. Consecutive monitoring of dissolved oxygen consumption by DOXTM to evaluate SaCon in platelet concentrates. AABB Annual Meeting and TXPO 2007. Anaheim, Oct.
- 7) Fujii Y, Asai T, Shimodaira S, Miyata S, Takano H, Inaba S, Hoshi Y, Takamatsu J, Takahashi K, Sagawa K. National survey of status of ABO-Incompatible blood transfusion in Japan. AABB Annual Meeting and TXPO 2007. Anaheim, Oct.

IV. 著 書

- 1) 田崎哲典. VII 章: 輸血副作用とリスクマネジメント. 認定輸血検査技師制度協議会カリキュラム委員会編. スタンダード輸血検査テキスト. 東京: 医歯薬出版, 2007. p. 265-89.

V. その他

- 1) 藤井康彦, 松崎道男, 宮田茂樹, 東谷孝徳, 稲葉頌一, 浅井隆善, 星 順隆, 稲田英一, 河原和夫, 高松純樹, 高橋考喜, 佐川公矯. ABO 型不適合輸血の発生原因による解析. 日輸血細胞治療会誌 2007; 53(3): 374-82.